A—177 行事食からみた食生活の動向 （第1報）

—年中行事について—

青葉学園短大 亘理浪子 吉中哲子 ○岩倉さち子 石綿きみ子

目的 食生活はゆるやかではあるが、時代の流れと共に生活様式の変化や食品産業界の家庭への影響などによって変化している。しかし人間の嗜好が短日月に変わることが稀である事等もあり、食生活が保守的な面を持っていることも事実である。そこで食生活の中で最も保守的性格が強いと思われる行事食をとりあげ、その実態を調査し、種々の角度から考察した。これによって今後の食生活の動向をさぐる手がかりにしたいと考える。

第1報として、正月以外の年中行事食について調査研究した。

方法 調査は郵送による質問紙法によって行った。対象として高等教育で家政学を学んだ女性で20代から70代までの2000人を選び、調査時期は昭和54年1～2月である。回収率は63.7％であった。調査内容は30の年中行事について、行事食の実施状況とその内容である。更に五節句及びお盆について行われている時期の調査も行った。

結果 行事食を全体的に見て、70％以上の家庭で行われているものに、鏡開き、桃の節句、彼岸、端午の節句、土用、クリスマス、家族の誕生日、年越が挙げられる。これらを行事別に比較すると、クリスマス、家族の誕生日は若い年令層の家庭で多く行われ、敬老の日は同居老人の有無に依り大きな差が見られ、お祭り、冬至、えびす講は郡部で多く行われている。喫食率の高い行事食としては、年越そば、柏餅、クリスマスケーキ、彼岸のおはぎ、土用のうなぎ、節分の福豆等が挙げられる。年中行事の行われる時期は新暦で行う家庭が多いが、お盆と桃の節句では地方別、都市郡別で差が見られた。